

連続講座 花崎皋平、を回顧する
——「三人称のわたし」はひらかれたか

A Personal Retrospection of the Serial Lecture
on Kohei HANAZAKI's Thought:
From the Perspective of the Third Person "I"

川本隆史*
Takashi Kawamoto

Abstract

The People's Plan Study Group (PPSG <http://www.peoples-plan.org/jp/>), set up in 1998 as a network of social movement activists and action-committed intellectuals, aims to search for alternative social, economic, and cultural systems controlled by the people that will eventually take over global capitalism with all its destructive consequences. PPSG initiated an alternative school, OPEN (an abbreviation for "An Opening for People's Education Network") in 2008. And this school offered a serial lecture on the thought of a Japanese philosopher, Kohei HANAZAKI (born in 1931) from 2014 to 2015.

In this paper, I will try to make a retrospective review of this lecture in series from the perspective of the Third Person "I", which unites the first person's subjectivity and the third person's objectivity.

I. PP研と花崎連続講座の幕開き

ピープルズ・プラン研究所¹ (略称PP研) は、「民衆 (ピープル) の目線でいまの社会を批判し、世界の人々と手をつないで「もうひとつの世界」をめざし」、1998年6月に設立された。この研究所 (といっても、その実態は文京区の雑居ビルの一角に集う多種多彩な人びとの総称以上のものではない) が、2008年秋から「オルタ・キャンパス OPEN」という「もうひとつの学びの場」を開校している。校名は "An Opening for People's Education Network" (民衆教育ネットワークの開口点) の頭文字四つを並べたもの。この学校が六回シリーズの講座「〈運動と思想〉花崎皋平が花崎皋平を語る」を丸一年間続けた (2014年5月31日～2015年5月23日)。ほかならぬ皋平さん (以下、本文では、「皋平さん」もしくは「花崎」の呼び捨てで通す) の誘いを受けて、本研究所の立ち上げ前から関与してきた私は、講座世話人グループ (天野恵一、丹波博紀、鶴

* 国際基督教大学教養学部 International Christian University

E-mail: kawamoto@p.u-tokyo.ac.jp

¹ <http://www.peoples-plan.org/jp/>

田雅英、松井隆志、道場親信——アイウエオ順）の末席に連なり、企画・運営にあたっている。準備と後始末までを含めると、二年近く梶平さんの文字と声に接し続けたことになり、手もとの印刷物やコピー、メモ類（および電子メールのメッセージ群）は相当な量に達している。

そこで本紀要の特集号への寄稿を依頼された好機を捉えて、連続講座にまつわるパーソナルな「記憶」を振り返りながら、これを共有可能な「記録」へと鍛え上げていく骨折り仕事——花崎独自の用語でもって言い換えれば、一人称単数の「わたし」を「三人称のわたし」〔花崎1976〕へとひろげる「対自化の作業」〔花崎1987〕²——に取り組もうと思う。インパーソナルな（impersonal = 非人称にして没人格的な）記述をこととする学術論文の作法から逸脱する作文となる点を、あらかじめお断りしておかねばならない。

手始めに、本講座の趣旨説明を兼ねた第一回（「著作以前の時代」／2014年5月31日）の呼びかけ文を見ておくとする。企画のイニシアチブをとった天野が稿を起こし、世話人および関係者のメーリングリスト（ML）で回覧のうえ、ウェブ公開・チラシ印刷にいたったものである。

第1回：著作以前の時代

「オルタキャンパスOPEN 連続講座〈運動と思想〉 花崎梶平が花崎梶平を語る」がスタートします。花崎さんは、1975年に書いた、ある論文で、このように論じています。

——「総括」と一口にいうけれど、いざとなるととてもむずかしい。自分のことは語れるようで語れないものだ。第一、なにがどうなったのかをみきわめるのもおぼつかない。ゴタゴタのままでは表現にいたらないし、さりとしてスッキリと整理してしまえば、キレイゴトの偽善におちいる。思わせぶりもいやだし、ざんげ、告白も売物にたくない。しかし、個の次元での少なからぬ変化を抜き運動の上での経緯をたどったのでは、経験の思想化の過程がぬけおちる。——

この「連続講座」を準備してきた私たちは、花崎さんに、今日にまで続くこの長い長い運動の経験の思想化のプロセスを、語りつくしていただこうと思いたち、集まりました。マルクス主義（哲学者）を自認し続けた花崎さんは、くりかえし、「マルクス主義を自分自身の（自前の手づくり）の思想という方向へつよく引き寄せて血肉化しなければならない」と主張し、そういう「手づくり」の作業をつみあげ続けてきました。

世代もバラバラで、花崎さんの思想そして運動への共感度には、当然にも、大いに個人差のある私たちに共通しているのは、まちががなく、花崎さんのこういう思想（行動）の姿勢への強い共感です。

さて、花崎さんの最初の著作は、1969年に出版された『マルクスにおける科学と哲学』です。第一回目は、まずこの〈著作以前〉の青年・花崎さんの時間を、話していただきます。1931年東京に生まれた花崎少年が敗戦（占領）から朝鮮戦争へ向かう時間のなかで、反戦運動へのコミットを開始し、実存主義・キリスト教、そしてマルクス主義の思想を自分の生きる思想の問題として考えはじめた時代です。

混沌とした思想と行動のはじまりの時から、今日まで、花崎さんと共に歩んできた武藤一羊さんを第一回目のゲストの討論参加者に迎えて、花崎さんの報告のあと、講座参加者が、自由に質問して、話を引きだす、こういうスタイルで、連続講座を持っていきたいと考えています。

² 「一人称単数の私の陳述（＝経験の基礎に立つ証言、反省、総括）から出発して、一人称複数の私たちに通底する歴史意識や社会認識を獲得し、そこからさらに時間（世代）と空間（地域）の制約をこえた三人称の普遍性の世界を構築する叙述に進む。そして過去に獲得されたその叙述から出発して、一人称の陳述を検証する。その往復です。」〔花崎1987：30〕

積極的な参加を呼びかけます。

「経験の思想化」に努めて止まない花崎へ寄せる、世話人一同の敬意を過不足なく表しており、手前味噌のようだが、今読み直しても心に響くものがある。関係者から事前に届けられたファイル群——①花崎本人の「精神的歩み〔1945年～1969年〕」、②ゲスト討論者・武藤一羊のコメント「〔著作以前〕についていくつかのポイント——交友のなかから」、③道場親信の質問項目「〔ぼくたちの未来のために〕をめぐって」、④花崎の著作・翻訳リスト——のコピー一式をA3判にそろえ、ホッチキス留めした小冊子が仕上がった。こうして初回の幕が切って落とされたのである。事前の割り振りに従い、私は司会を受け持った。MLでの事後報告によると、参加者51名に上る盛会であった。

私個人にとって初回の最大の成果は、 Kommunizmus にコミットする一歩手前の花崎の（ういういしい！）発言に触れたことである。14歳で敗戦を迎えた少年が「なにか頼りになるものを求めてさまよう」過程で、キリスト教会の門をたたき、大学に進んでからは詩のサークルに加入する³。道場から存在を教わった同人誌の創刊号（1952年11月5日発行）は、日本の現代詩を研究する田口麻奈の厚意により全頁コピーを入手し得た。創刊の辞（「ぼくたちの未来のために」）の冒頭、「共通の価値基準に立って、相互批判、自己批判が絶えず行われるところのみ、生きた共同体としての集いの存在理由がある。それならばぼくたちの共通の価値基準は何かということの説明しなければならぬだろう」と決意表明した21歳の梶平さんは、このマニフェストを次のように結んでいる〔花崎1952:3〕。

「ぼくたちの未来のために」、ぼくたちは何を望み、何を価値基準として行こうとするか、ぼくたちは単純に、人間を守るといふことだ、と言うつもりだ。未来は何処にあるのか？ あらゆる偶像の支配、権力、機構、兵器、観念、それら一切の支配に抗して人間を擁護することなしに、未来は存在し得ないのだ。幸いに詩作とは人間を守る仕事である。詩を作ることの出来る間、ぼくたちは人間であることを忘れずにすむ。それ故にこそ、現在、この疎外された人間関係のなかで詩作するとは何と困難なことであろう。言語すらが共通であり得ない関係のなかで、人間から人間に伝わる詩を書くことが出来なければ、ぼくたちの意図は実現されないだろう。あらゆるものに抗してひたすら人間をうたうこと、その弱さにせよ、そのかけがえのなさにせよ、それが持つ意識の広大な拡がりによせよ、又行動の崇高さにせよ、とにもかくにもぼくたちの眼を人間に据えよう。あらゆる偽装と仮面を剥して、偽りのない眼で人間の在り様をうたい、人間に愛情を抱き、これを守るために一切を賭して努力することによってのみ、ぼくたちはぼくたちの未来を獲得することが出来るであろう。その日のために、ともよ、美しいうたをつくり出さねばならないのだ。人間のための、人間のうたを！

《自由》の証言⁴および《共通の価値基準》の探究とを二つながら追い求める若き詩人の身構え

³ 講座第二回のレジュメの補足として花崎から送られてきたファイルに、詩人を志す心境を綴った1951年5月18日の日記（大学二年生）が抜粋されている——「私はとにかく詩人になりたい。詩人とは存在へ思辨的観照的に、即ち哲学的に関わるのではなくて、存在の核心へ、自らの体をもって情熱的に関わる者であると理解する。詩人はまず生きて歌う。哲学者は、考えはするが生きようとはしない。むしろ自分が平静に生きるのにふさわしいように思想を引き込む」（資料通しページ7枚目）。

⁴ 「この〔敗戦後の〕時期の成果が試されるのは、自由がぼくたちの実感となって居り、それが人間性の解放であったことをぼくたちが身をもって証しすることによって以外にはないであろう」〔花崎1952:1〕。

は、その後《アイデンティティ》と《共生》の哲学の構想へとトーンを変えながらも、根底のところでは見事な一貫性を保持している。

II. 第2回講座と「記憶のケア」

二回目の講座（2014年9月7日）のやや長めの告知を下に掲げておく。これまた力強いアピール文である。

第2回：『力と理性』の時代

連続講座「〈運動と思想〉花崎皋平が花崎皋平を語る」の第2回をご案内します。

北大本館封鎖解除に対決し、本館内で実力抵抗を試み、「現住建造物放火」・「非現住建造物放火」・「公務執行妨害」・「兇器準備集合」・「建造物侵入」の5つの罪名で起訴された「北大全共闘」の四人の学生の裁判（1970年2月～71年9月まで）の特別弁護人としての活動をふりかえって書かれた「幻の大学の立ち拠——北大本館封鎖解除事件裁判の特別弁護人の座をおりて——」（『日本読書新聞』71年12月6日号。『力と理性—実践的潜勢力の地平から』（現代評論社・1972年）所収）、で花崎さんは自分の「最終弁論」を引いています。

「…この事件で、私をしてこの席に座ることに、むなしさと矛盾をおぼえさせてきたのは私もまた文部教官・北海道大学助教授・文学部というレッテルを身につけた教授会メンバーとして、被告諸君を今日この席につけたことに責任があるということである。その私がこの被告諸君を弁護することのむなしさと矛盾がある。この被告諸君は、われわれによって弁護されるべきではなくわれわれも本来、弁護などすべきではない。ここでの弁護人としての位置づけは、真の関係をおおいかくす。私は教師らしくふるまい、学生諸君は学生らしくふるまうという関係、私が特別弁護人であるらしくふるまい、裁判所へ大学で生じた事実経過を立証しようと努める…それらはすべて演じられる一種の演技であった。大学の中で、われわれはギリギリのところ、対立しあわざるをえなくなる。学生諸君は、われわれにむかって、あなたは文部教官であることによって無罪ではないとせまる。われわれは、君達も受験競争によって他の人を蹴落とし、きまった大きさのパイのわけ前にあずかっていることにおいて無実ではない、と言いつ返す。そうしたところではじめてなにか共同の場がひらけてくる。そこには、教師らしさと学生らしさでよそおわれない関係がひらけてくる。いまのわれわれの関係は、被告と特別弁護人との関係である。この関係は今終わろうとしている。この席に座わるのもあと一回だけである。この席をおりることは、私にとってはひとつの解放である。被告諸君にとっては、あるいはその逆のことがおこるかもしれない。私が、そこで、やれやれ苦しかった裁判は終わった。あれだけやれば、まあよからうと自分に言いわけして、研究室へ戻り、69年に読みさしておいた本をひらいて読み出すとしたら、私と被告諸君のつながりは又切れてつながらぬものになってしまうであろう。そうならないために、この際この席をおりるとともに、もうひとつもっている席の方もおりることにしようと思う。この一年余、この席に座っただけで、なんにもできなかったこと、まったく無力であったことを被告諸君にも、その他の支援された方々にも申し訳なく思うと告げて終りとする」。

この引用の後、花崎さんは、こう書いています。

「先生ごっこはやめるべきときだと思った」。

この、あの〈学生反乱の時代〉の精神を象徴する言葉（態度）を、ある種の強い共感をもって受けとめた人間は、当時少なくともなかったはずです。それから四十年以上が流れた今、その〈共感〉の思想的な意味をめぐって、花崎さん本人をふくめて論議する、そんなことが可能になればいいと考え、私たちは今回の講座を準備しています。対象とするテキストは、この『力と理性』と、その「あとがき」で、「マルクスにそくして」、自分の哲学の課題である実践的潜勢力を引きだす試みをしたと述べている『マルクスにおける科学と哲学』（1969年盛田書店）の二冊です。運動的には全共闘と札幌べ平連スタートの時代です。

前回同様、質問と討論の時間も長くとるつもりです。積極的に参加してください。

第2回も私が司会を仰せつかった（参加は40名ほど）。なおこの回から、花崎のレジユメ（「精神史の歩み その2 [1970年～1973年]」）と「事前準備コメント&質問集」に当人および関係者の書き物のコピーを添えたため、会場配布物のヴォリュームが大幅に増えている（初回は表紙を除いてA3判両面印刷4枚だったのが、A3判18枚に！）。今回の収穫は、これまた道場が発掘し、PDF化してくれた『11・8北大本部裁判闘争記録（Ⅳ）』所収の特別弁護人・花崎の「最終意見陳述」（1971年7月14日付け）〔花崎1971a〕である。上記の案内文に引かれている「総括的意見」の結びは、たしかに「あの〈学生反乱の時代〉の精神を象徴する言葉（態度）」として少なからぬ人びとに「ある種の強い共感をもって受けとめ」られたに相違ない。19歳だった私は、定期購読していた『日本読書新聞』第一面トップの檄文「幻の大学の立ち拠」〔花崎1971b〕に賛嘆の気持ちを抑えられなかった記憶がある。ただし、当時の私が花崎の痛苦の念を心底から理解できていたとは、とうてい言えない。「高校暴動世代」の一員として、「造反教官」のひとりが出た出処進退の潔さに感心しただけの可能性も否定できない。

そうした歪みのある記憶を「ケア（＝世話・手入れ）」⁵し、「三人称のわたし」へとひらいていくべく、40数年ぶりに初出の紙面を確認してみた（もちろん縮刷版である）。タイトルと闘争現場写真（『北緯43度・荒野に火柱が』、北海道解放大学出版会、1970年より）の下に組まれたリード文（無署名）は、こう触れ込んでいる——「戦後民主主義支配構造の、その基底に孕まれた諸矛盾を一挙に噴出させた全共闘運動。しかし己れ自身の解体をも内在したそのダイナミクスが奪われてから二年を経過した。運動、によって突きつけられ、抉り出された諸矛盾は、だが運動、の消滅によって消え去るものではない。この間、「北大本館封鎖解除」裁判闘争に関与してきた花崎皋平氏に、「闘争の場」と「研究室の場」との落差を見つめる中から「知識人存在、の現在の様相を探ってもらった」。

記事本文半ばの以下のようにくだりに、現在の私が（おそらく初読の際とは異なる）深い感慨を覚えたことを打ち明けておこう。

私がいまここで焦点としたいことは[……]全共闘運動がうみだし、その敗北後も、けっしてほろびることはないと思われる思想の問題である。それはほんとうに単純なことだ。あたりまえのことだった。ひとは自由であり、自由に生きることができるし、そう生きなければならぬ。ひとは自分のものと他人のものということにこだわる必要がなければ平

⁵ 「全国被爆二世教職員の会」の地道な活動を知らされた私は、原爆の「記憶」を固定化してしまうのではなく、その「記憶」のゆがみや欠落をていねいに見直す作業を通じて、固定観念へと凝固した「記憶」をほぐしつつ、共通の認識に向かって歩むことを「記憶のケア（世話・手入れ）」と名づけたことがある〔川本2004〕。

等になれる。ひととひとは協力してなにごとかをなすことに情熱を感じられれば、一身の保障のために他人を敵としてあくせくするよりはずっとたのしい……そういうたぐいのことである。根底的な問いかけといわれたものがはらみ、予感していたことはそうした真実をたしかめようとする知的活動であった。そこにこそ、幻の大学の立ち拠があった。

「単純なこと」、「あたりまえのこと」として措定された《自由》、《平等》、《友愛》という理念、それらの考究を「立ち拠」とする「幻の大学」——花崎（たち）から手渡されたこうした展望を、私（たち）はけっして断念してはなるまい。

Ⅲ. 『生きる場の哲学』再読

三回目の講座は、2014年11月15日に挙行された。

第3回：1970年代『生きる場の哲学』まで

連続講座「〈運動と思想〉花崎皋平が花崎皋平を語る」の第3回をご案内します。

第3回は、1970年代の時間、著作としては、おそらく花崎さんのものとしてはもっともポピュラーに読まれた『生きる場の哲学——共感からの出発』（1981年）までを話していただきます。

85年に刊行された『社会的左翼の可能性』の中で、花崎さんは、この時代をこのように回想しています。

1980年代になって、私は深刻な思想的転回を経験しました。そのひとつは、北海道という地域に根ざすことを真剣に考えるところからぶつかった問題です。北海道は、先住アイヌ民族の自由の土地であったこと、そこへ本州から渡来した和人（シャモとアイヌでは呼ばれています）がカブクで入り込み、全土を占拠し、アイヌ民族からその言語と文化をうばって同化を強制してきたことを、アイヌ自身からつきつけられ、どう考えるのかを問われたのです。私が日本国家への根底からの批判を志すもうひとつの、より強い動機はここにあります。日本人であることを批判的にとらえかえし、日本国家をその近代の成立までさかのぼって否定する思想的立場に立たずには、この地で、アイヌ民族と共に生きる希望を望み見ることはできない、と考えるからです。

伊達火力発電所建設反対などの北海道での地域住民運動への深いコミットは、実に深刻な「思想的転回」を花崎さんに強いたようです。その転回は先住民（アイヌ）の発見であり、唯物論者である花崎さんがスピリチュアルな世界とエコロジーの問題へ接近していく回路の発見だったようです。この「転回」をもたらした運動と思想のプロセスを語っていただきます。

毎回、質問は自由です。参加者相互の討論も歓迎です。積極的なご参加をお待ちしております！

なお、今回は主に以下の4冊を中心に議論します。ぜひ読んでいらしてください！

——花崎皋平『風はおのが好むところに吹く』田畑書店、1976

——渋谷定輔・北沢恒彦・花崎皋平『朋あり遠方より来る：現場からの哲学』風媒社、1976

——花崎皋平『いのちをわかちあう』田畑書店、1980

——花崎皋平『生きる場の哲学——共感からの出発』岩波新書、1981

この回は、司会と質問者を道場が兼務してくれた。花崎のレジメ（「精神史の歩み その3 [1973年～1980年]」、道場の質問への回答および米沢薫の意見への応答）、「伊達火力に関する年表」、「伊達裁判に勝ってもらう会ピラ」ほかの各種ドキュメントを綴り合わせたら、A3判19枚に膨らんだ。裏方に回って気は楽だったとはいえ、密度の濃い議論を追いかけるだけで疲れ果てた半日だった。毎回、日記と自作を丹念に再読して詳しいレジメを用意してくる梶平さんの労苦は察して余りある。だが、こうした協働・努力の積み重ねによってこそ「三人称のわたし」への活路が切り拓かれるのではないだろうか。

第3回のハイライトは『生きる場の哲学』——たぶん最初に通読した花崎の単著だったろうし、刊行前年の1980年4月から大学の教壇に立つようになった私にとって、忘れられない一冊となっている。初体験となる一般教育科目「倫理学」の教材に、私は吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』（1937年初版）を採用した。鶴見俊輔がこの児童書を絶賛していたのを思い出したからである。講義の枠組みも、鶴見のデビュー作『哲学の反省』（1946年／『鶴見俊輔集』第三巻、筑摩書房、一九九二年所収）が打ち出した新機軸——「哲学は次の三条の道に従って把握される場合、現代の社会においても生きた意味をもつことが出来る。第一に思索の方法の総合的批判として把握される場合、第二に個人生活及び社会生活の指導原理探求として把握される場合、第三に人々の世界への同情として把握される場合、即ちこれである」——に沿って、「批判」、「原理」、「共感」（「同情」の言い換え）の三本柱でもって編成しようとした。学生有志の要望で課外に始めた読書会のテキストとして、新刊の『生きる場の哲学』を候補に推したのは、著者の名前に馴染みがあったのと何よりも「共感」が副題に掲げられていたからにはかならない。

花崎のレジメによれば、「1970年代の実践と思索のとりあえずのまとめである」この本は、1979年10月19日から80年12月6日までの一年以上を費やして書き下ろされている。ここでは久々の読み返しを通じて、新たな示唆を受けた所論を二つばかり抜き書きするにとどめよう。

「「やさしさ」とは、疎外された社会的個人のありようを、共感という方法でとらえるときに生ずる感情である。このような感情を触媒にしてはじめて、人民相互の社会連帯が結晶となるのではないだろうか。この「やさしさ」と「決断をふくむ理性」——形式的合理性に対立する実質的合理性——とのむすびつきに、私は社会変革をめざす実践の領域を見ようとした。」〔花崎1981：12〕

「主体形成の基礎になるもっとも大事なものは、共生の感覚とでもいうべきものである。共生の感覚とは、人と人、人と風景との有機的一体性の感覚である。[……] 今日、その復活を希求するとき、価値理念の側から刺戟をおくって感覚をめざめさせ、敏感にする働きかけが必要であるように思う。その価値理念として、わたしは、共感と友愛の理念をあげた。このような理念にみちびかれ、その刺戟によってめざめる共生の感覚を土台にしてはじめて、共同社会建設にまつわるさまざまな理論課題と取り組む知的営為も、実践者から浮き上がらずに、関係の相互性のなかで批判され、確かめ合われ、一人一人の主体の力能として定着されるであろう。そのような意味での「根拠地」関係においては、運動や闘争の遂行と同時に、あたらしい実践者群を生みだす教育の契機と、自前の文化や遊びを創造し表現する安息と祝祭の契機とがあわせ持たなければならない。」〔花崎1981：177-178〕

「やさしさ」の前提に「疎外」が控えていること、「共生の感覚」を土台とする「根拠地」での運動・闘争を持続させるためには「教育」や「安息と祝祭」が欠かせないこと——以上の二点をしっかり銘記しておきたい。

IV. 評伝『静かな大地』の背景

講座第四回は、年明けの2015年1月24日に催された。今回の予告は簡明なアナウンスに収まっている。

第4回：「地域をひらく」シンポジウム／近代化とアイヌ民族

伊達火力発電所や泊原発の反対運動など、さまざまな市民運動のただ中で、生きた哲学と手づくりの思想を追求してこられた花崎皋平さん。この半世紀近くの日本社会の変化を、花崎さんご自身の生から照射してお話いただく連続講座です。第4回は、70年代の運動をくぐりぬけてまとめられた『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』（1988年）を中心において、花崎さんのお話をうかがいたいと考えています。

ぜひ多くの方にご参加いただければと思います。

会場で配ったのは、花崎のレジユメ（「精神史の歩み 4 [1981年～1988年]」および「事前質問への返事」）、二人の担当者（道場と鶴田）による質問メモ、花崎の文章〔花崎1982〕、『静かな大地』書評ほかを合わせてA3判14枚の資料である。

司会を買って出た手前もあって、メイン・テキストである『静かな大地——松浦武四郎とアイヌ民族』（花崎1988）を熟読玩味した。幕末の蝦夷地を踏査した松浦武四郎（1818年～1888年）が、「アイヌ民族のその内なる怒りの火に〔……〕ふれたことによって人生が変わった」という「彼自身の意図せざる自己変革のドラマ」を活写して余すところがない。

たまたま同書と並行して、森鷗外の史伝の傑作『澀江抽斎』を旺文社文庫版（1968年）で初めて読み切ったばかりだったので、この評伝の世界にも「共感」をもって参入し得た気がする。ちなみに花崎その人も「森鷗外『澀江抽斎』論」（初出1979年／〔花崎1984〕に収録）が「私自身に即しては重要である。鷗外が澀江抽斎の日常と研鑽を淡々と叙述する態度から学ぶところは多かった。田中正造論と平行して松浦武四郎の、幕末の蝦夷地を地理取調にくまなく歩いた記録から、当時のアイヌ民族の困窮、その生きる姿勢などをとらえだす仕事をしたのも、この鷗外の史伝を読んだことと関係している」と述懐していた（「精神史の歩み 4」）。また『静かな大地』に対して、「私の仕事のなかで、田中正造論とともに重要なものである」との自註が付されている点も注目に値しよう（「精神史の歩み 4」）。

V. 「共生」と「三人称のわたし」をめぐる問答

第5回は2015年3月28日に設定され、天野が司会、私はメイン質問者に指名された。まずはPRの文章を引用する。

第5回：「ピープルズ・プラン21世紀」（1989年）とその後

—『アイデンティティと共生の哲学』、『個人／個人を超えるもの』の時代

「1989年夏に、世界の民衆運動の活動家が日本列島に集まって多様な民衆行事を行い、最後に水俣で総括会議を開いて採択した文章」である「水俣宣言」について、花崎さんはこう、解説している。

まず、森林にすんでいる先住民の前に突然ブルドーザーが入ってきて、森の木が伐り倒されるような事態。「自分たちの生存に関わる」決定への先住民が関与できない事態が世界のいたるところに生まれている。これに抗するために、「多国籍企業のグローバルな開発行為に応じたトランスナショナルな権利が必要ではないか」というメッセージが含まれている。「この他者の決定による自主的な決定の排除に対して、決定権は自分たちにあると、侵害された権利の回復を要求する主張、回復的人権としての自己決定権という」、開発伐採に対決する「回復的人権」こそが「民主主義」であるというメッセージもそこに含まれている。

この「PP21」に北海道の世界先住民族会議の事務局メンバーとして、積極的にコミットした花崎さんが、その運動体験をバネにつむいだ思想（論理）を中心に討論します。

ご本人の報告だけでなく、今回も討論の時間をたっぷりとります。

ぜひ積極的に参加してください。

なお、今回は主に以下の2冊を中心に議論します。ぜひ読んでいらしてください！

——『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房、1993.05

——『個人／個人を超えるもの』岩波書店（21世紀問題群ブックス4）、1996.01

配布資料はA3判22枚の大冊になった。主なものは、花崎のレジユメ（「精神史の歩み 5 [1989年～1996年]」）、質問レジユメ（運営委員会および川本から）、花崎のリプライ、世界先住民族会議記録集1989年、各種関連文献（拙論〔川本1997〕、書評〔川本1993〕、対談〔花崎×川本1998〕などを含む）である。この時期（1989年から96年）に上梓された花崎の作品群に即して質問項目をまとめるにあたり、19歳の冬に発する読書と交流の記録を年譜風に整理してみたところ、A4判8枚びっしりの分量になった⁶。この文書のタイトルには「少しのことにも、先達はあらまほしき事なり」という『徒然草』（第52段）の名言を拝借している。私にとって皋平さんこそ、言葉の真の意味での「先達」だったと痛感したからである。

ところで肝心の私の質問（三点）については、これを「三人称のわたし」へとひらき、つなげてみるため、とりあえずもとのファイルのまま下に貼り付けておく。

(1)花崎さんの思索と実践における「ケアと正義」

「共感」から(再)出発された花崎さんの哲学（『生きる場の哲学』1981年）は、どのような「条件と事情」（ニーチェ『道徳の系譜』）のもとで90年代の「共生」論へとシフトしていったのでしょうか。

『民衆主体への転生の思想』（1989年）において提起された「生き方を重ね合わせる運動の原則」——①「共感と友愛の原則」および②「正義と道徳の原則」——と『アイデンティティと共生の哲学』（1993年）における「反差別」の二原則——①関係の非対称性の暴露と対称性の関係の設定、②「共生の義務と権利」——とは、どのような関係にあるのでしょうか。後者は前者の「系」もしくは具体的問題への「応用」例と考えてよろしいのでしょうか。

総じて、『ケア』（目の前の苦しみへの応答）と『正義』（全体を視野に収めた公平性の追求）との二

⁶ 花崎をダイレクトに引き合いに出した拙稿として、〔川本1985〕、〔川本1991〕、〔川本1997〕、〔川本2008〕ほかがある。

つをどのように編み合わせようとなさっているか、をこの機会にぜひ花崎さんにうかがいたいです。

(2) 花崎さんの方法論の「転換」について

『風はおのが好むところに吹く』（1976年）で打ち出された「三人称のわたし」（わたしを三人称化して異化すると同時に、三人称的他者とわたしを共感でつなぐ手法）と、『週刊読書人』のリレー連載（1993年6月14日号）において示唆された「理解の方法的抑制」——「理解できないものは理解しようとしなさいこと」および「理解できなくとも屈託せず、くつろいでいられる相互関係をつくること」を通じて、「自分の意識のうちに丸ごとの他者の占める場所を空けるゆとりをもたすこと」——との間には、微妙なニュアンスの違いやカ点の変化が見てとれます。こうした花崎さんの方法論の「転換」を促した背景やねらいについて説明してください。また「三人称のわたし」や「理解の方法的抑制」と花崎さんが早くから自家筆叢中のものとされたはずの「弁証法」との異同についても、教えてもらえませんか。

『アイデンティティと共生の哲学』（1993年）終章で明示された「ピープルになる」という課題（私と他者とがいつでも加害と受苦の関係になる可能性と必然性、その歴史的被規定性を承知したうえで、しかもその場から「共に生きる」関係をめざすこと）は、花崎さんの同時代人にして先行者二人の問題意識とどんな関係があるのでしょうか。すなわち①吉本隆明が訴えた「大衆の原像をたえずみずからのなかに繰り込むという知識人の思想的な課題」（『自立の思想的拠点』1966年）および②鶴見俊輔の『哲学の反省』（1946年）が展望した哲学再生のための「三条の道」（批判、原理、同情——とくに三番目の「人々の世界への同情」）や『日常的思想の可能性』（1967年）の探究といったスタンスから、花崎さんは何を学びとられ、両者との間にどのような距離をとろうとなさっているのでしょうか。これは、花崎さんの著作ワールドに馴染む以前、吉本や鶴見を読みふけていた一読者からの素朴な疑問でもあります。

(3) お父上のごこと

お母上の介護体験が〈「世話」と「共感」の文化〉を（再）評価するきっかけを与えたことについては、繰り返し語ってらっしゃいますし（『個人／個人を超えるもの』1996年、東別院ブックレットⅢ『世話と共感の文化』1998年ほか）、ご母堂から論語や孝経の素読を習われたこと（『森鷗外『澀江抽斎』論』1979年）も花崎さんの思想形成において重要な契機となっているものと思われます。お母上・花崎貞（采琰）さん（1903～1998）の自伝『墜露のような人生』（私家版1992年）も興味深く拝読しました。

では花崎さんにとって、お父上・利義さんとの関係はどのようなかたちで思索の誘因・モチーフとなっているのでしょうか。公開の席上では言明しにくいところも多々あるかと予想されますが、愛読者のひとりとして一度は尋ねておきたいという気がつります。差し支えの無い範囲でお答えいただければ有り難いです。

花崎のリプライをいかにつまんで再現しておこう——（1）に対しては、「生き方を重ね合わせる運動の原則」は三里塚と水俣の闘いを通じて考えたものであり、新左翼諸党派に対する批判が含意されていたこと、「反差別」の二原則は、アイヌの人びととの共同作業から学んだことが大きいとの舞台裏を明かしてもらえた。また「ケアと正義についての問いには、クリアカットの答えを持ちません。そのつど、生ずる具体的問題に、緊急度、必要度に応じて答えようとすることしかできません」と率直に認めている。「経験の思想化」を率先垂範する梶原さんを手本と仰いできたつもり私だったのに、（1）の中身は「経験」から遊離した机上のクエスチョンの域を出ていない。そこを衝かれたような思いがした。

（2）に関しては、次のような返答を頂戴した——まず「理解の方法的抑制」という着想は「共

に暮らした相手（アイヌ女性）との関係で痛切に自覚したことです。無理に理解しようとするのが、強制、理解しない相手を非難し、機嫌を悪くする態度になる経験からです。理解とは、自分の解釈システムに取り込むことに通じると気がつきました」とあり、さらに「それは自己相対化としての自己否定であり、あいだを空けることによる他者の承認となり、それを通じての自己承認へといたる道ではないかと考えました。これは弁証法といえるのではないのでしょうか」と。そして「吉本隆明、鶴見俊輔からの影響はありません」と。`ひいきの引き倒し、のような愚問を投げた私を、やんわりたしなめてくれる対応だった。

(3) への答えはこう戻ってきた——父は「大正時代の文化を身につけてきた人で、農村出で保守的ではありましたが、子どもの進む道の選択には寛容でした。妻の学問好きも許していました。画家になりたかった人で、晩年はアマチュア画家として画業に打ち込んでいました。画家では安井曾太郎、曾宮一念を敬愛していました。学者、思想家では谷川徹三、安倍能成などと交流がありました」、と。

ゞすれちがい、を含んだ以上の質疑応答を介して、「三人称のわたし」へと幾分なりとも接近しえたと言自己評価したいところではある。

VI. 〈ピープル〉と「百戦百敗」の思想

2015年5月23日、いよいよ最後の講座を迎えた。司会は道場が担当する。

最終回：〈ピープルの思想〉をめぐって

花崎さんは、自分の使う「ピープル」という概念について石牟礼道子さんの言葉にそくして、以下のよう説明しています。

「石牟礼さんは最近、深い宗教的思いを作品にこめているのですが、石牟礼さんの場合も、浄土真宗に近いけれど、より基層の、より底辺の虫や魚といっしょに生きてきた民衆の心の中にある宗教的な威厳、敬虔な感情というものに自分も帰依するというあり方に立っていると思います。天地自然に対する畏敬から出発しても、それもナショナリズムというかたちで、国家という力に結びつけて、他を支配する欲望を強化する方向と、石牟礼さんのようにごくごく小さなものの中に生きる思いや優しさ、威厳を見つけていく方向とがあるわけです。

私は、石牟礼さんのような民衆観、人間観に基づく精神のあり方、一人一人が真に民衆性に目ざめるあり方としてとらえ、『ピープルネスに生きる』という言葉で、世界のどこにでも通じる普遍的なあり方へつなぎたく思っています。日本の伝統的な宗教感情にしても、権力と結びつく方向と『ピープルネス』に向かう方向とにはっきり分かれると思います」（『ピープルの思想を紡ぐ』）。

第6回の「花崎講座」は、最終回ということもあり、花崎さんが、「価値理念」を担う「変革主体」として発見したこの、「ピープル」あるいは「ピープルネス」とは、なんであるのか、という問題を中心に、話していただき、討論していきたいと思います。

なお、今回の参考書籍は次のとおりです。ぜひ読んでいらしてください！

——『ピープルの思想を紡ぐ』（七つ森書館 2006年）

——『田中正造と民衆思想の継承』（七つ森書館 2010年）

——『天と地と人と』（七つ森書館 2011年）

配布資料は、花崎のレジメ（「精神史の歩み 6 [1995年～1999年]」）、丹波の「事前準備の質問」、〔花崎2002〕をめぐる論争文献ほか、それらがA3判11枚に詰め込まれている。本番では天野および大橋成子との対論も組み入れ、まさしく有終の美を飾るイベントとなった。紹介・吟味しておきたい論点は多岐にわたるが、立ち入って詳論する紙数が残っていない。最終日の主題である《ピープル（ネス）》や田中正造と石牟礼道子の思想については、本誌掲載の花崎の講演記録から直接・間接の教示が得られるだろう。よって小論は、最終回の花崎のレジメの一節を引いて結ぶとする。1996年の9月初旬「新設するPP21研究所〔＝構想段階にあったPP研のこと〕で、私は何をやりたいかについて考えてみた」メモである。

次の世代の哲学・倫理学の研究者といっしょに、アジア太平洋地域の実践的課題を踏まえたいうえでの思想と理論の創造に取り組みたい。そこには先住民族・少数民族が提起する課題、ジェンダー、環境とエコロジー、生命論、サブシステムとスピリチュアリティなどが絡んでくる。それらを思想の切り口でとらえる作業をしたい。

振り返ってみて、私個人は、この方向にすこし進んだけれども、次の世代（大学闘争・全共闘運動の世代を念頭に置いていた）との共同、協力関係づくりは成功しなかった。PP研究所という場に出てくる人は少なく、多くはアカデミーでの研究活動に重点をおく姿勢であった。

この部分を読み上げた花崎は、「残念だった」との真情を吐露した。上記の反省から20年近く経た時点でも、花崎らの活動を継承しつつ「アジア太平洋地域の実践的課題を踏まえたいうえでの思想と理論の創造に取り組もうとする後続世代の哲学・倫理学研究者が、着実に育っていると判定しがたい。「私が続きましょう」と名乗りを挙げたいのはやまやまだが、私ひとりではあまりに非力である。だがここで、皋平さんから教わった田中正造の日記（1909年8月24日）の一節——「困苦、貧苦、節義、言行一致、主義貫徹に対する困苦艱難が…経験の度数の数十百回ニ達して、百戦百敗、その研磨に得たる自得力堅忍となりて、夫れより発動せる以上の良知良能の付合せるにあらざれば…時勢を造る人とは云へず」——を思い起こそう。次世代との「共同、協力関係づくりは成功しなかった」のかも知れないけれども、そうした失敗＝敗北の「経験」に学ぶことはできる。正造の「百戦百敗」の思想こそ、今日、私たちが堅持すべき思想ではないか」〔花崎2006：ii〕との提言の正しさを、私は信じて疑わない。

参考文献

- 川本隆史1985年「科学と倫理のあいだ——「科学者の社会的責任」をめぐる」、『理想』628号、理想社。
- 1991年「抵抗の倫理学へむかって」、『現代哲学の冒険13制度と自由』、岩波書店、所収。
- 1993年「書評：花崎皋平著『アイデンティティと共生の哲学』」、『週刊読書人』7月26日号。
- 1997年「「共生」の事実と規範——《いのちのケア》に向かって」、栗原彬編『講座 差別の社会学4 共生の方へ』、弘文堂、所収。
- 2004年「記憶のケアから記憶の共有へ——エノラ・ゲイ展示論争の教訓」、『思想』967号、岩波書店。
- 2008年『共生から』、双書《哲学塾》、岩波書店。

- 花崎皋平1952年「ぼくたちの未来のために」、『ぼくたちの未来のために』創刊号、編輯・発行＝明日の会。
- 1969年『マルクスにおける科学と哲学』、盛田書店（増補改訂版、社会思想社、1972年）。
- 1970年「《書評》新しい地平とは何か——廣松渉『マルクス主義の地平』」、『思想』552号、岩波書店。
- 1971年a「最終意見陳述」、『11・8北大本部裁判斗争記録（IV）』、編集・発行＝公判斗争記録刊行委員会。
- 1971年b「幻の大学の立ち拠——北大本館封鎖解除事件裁判の特別弁護人の座をおりて」、『日本読書新聞』12月6日号＝1624号（〔花崎1972〕に再録）。
- 1972年『力と理性——実践的潜勢力の地平から』、現代評論社。
- 1976年『風はおのが好むところに吹く』、田畑書店。
- 1980年『いのちをわかちあう』、田畑書店。
- 1981年『生きる場の哲学——共感からの出発』、岩波新書。
- 1982年「「地域をひらく」たたかいとその交流運動——基調試案」（上・下）、『新地平：月刊労働者総合誌』3-4月合併号&5月号、新地平社。
- 1984年『生きる場の風景——その継承と創造』、朝日新聞社。
- 1987年「批評に答えて」、『書齋の窓』367号、有斐閣。
- 1988年『静かな大地——松浦武四郎とアイヌ民族』、岩波書店（岩波現代文庫、2008年）。
- 1993年『アイデンティティと共生の哲学』、筑摩書房（平凡社ライブラリー、2001年）。
- 2002年『「共生」への触発——脱植民地・多文化・倫理をめぐる』、みすず書房。
- 2006年『ピープルの思想を紡ぐ』、七つ森書館。
- 花崎皋平×川本隆史1998年「対談：自己決定権とは何か」、『現代思想』第28巻第8号、青土社。